

第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム 「アジア研究の過去・現在・未来」全記録（Ⅱ）

第二部 パネルディスカッション「アジア研究の過去・現在・未来」

I 冒頭発言

パネリスト：

リチャード・ダイク（ハーバード大学アジアセンター顧問）
今井耕介（ハーバード大学教授）
趙全勝（アメリカン大学教授）
益尾知佐子（九州大学教授）
クリスティーナ・L.デイビス（ハーバード大学日米関係プログラム所長）
ジェームズ・ロブソン（ハーバード大学アジアセンター所長）

モデレーター：佐藤元彦（愛知大学国際研究機構長）

田中英式（愛知大学経営学部教授、総合司会） それでは、第二部のパネルディスカッションでは本学国際研究機構長の佐藤元彦先生にモデレーターを担当していただきます。佐藤先生、よろしくお願いいたします。

佐藤元彦（愛知大学国際研究機構長）

それではパネルディスカッションをこれから始めさせていただきます。最初に私のほうから簡単にパネリストのご紹介を申し上げます。

私の隣から順番にご紹介いたしますと、さきほどご講演いただきましたハーバード大学のクリスティーナ・デイビス先生、今日の午前中にご講演いただきましたジェームズ・ロブソン先生、ハーバード大学アジアセンターの顧問をされておられるリチャード・ダイク先生、ハーバード大学の今井耕介先生、アメリカン大学の趙全勝先生、九州大学の益尾知佐子先生でございます。

いずれもハーバード大学の関係者もしくはハーバード大学とゆかりのある方々ばかりでございます。皆さん勢ぞろいいただきまして、ありがとうございます。詳細なプロフィールにつきましては、皆さんにお配りのチラシのほうに書かれておりますので、ご参照いただければと思います。

まずはダイク先生からご発言をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

リチャード・ダイク (Richard Dyck、ハーバード大学アジアセンター顧問)

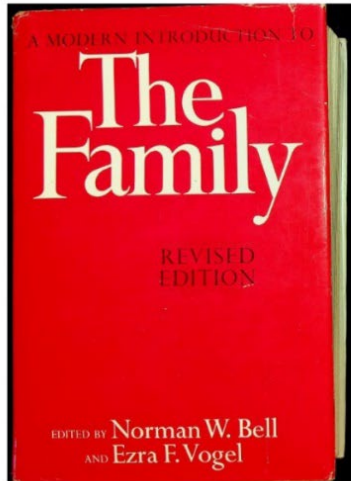
だいたいご紹介にあずかりましたダイクと申します。実は私はこの中でヴォーゲル先生の弟子として一番長く、一番の年長者です。私がヴォーゲル先生に指導教授になっていただいたのは昭和 42 年 (1967 年) でした。そうして勉強し、半導体業界をテーマにして博士論文を書きました。その後、実際に日本とアジア全域の半導体業界でさまざまな仕事をやらしていただきました。ですから、実務のかわたらに研究をしているという感じですね。ヴォーゲル先生には 50 年以上の付き合いを通じて、非常にお世話になってきました。毎週数回、email を通じて先生とやりとりして、緊密に交流してきました。

ヴォーゲル先生の著書を再読

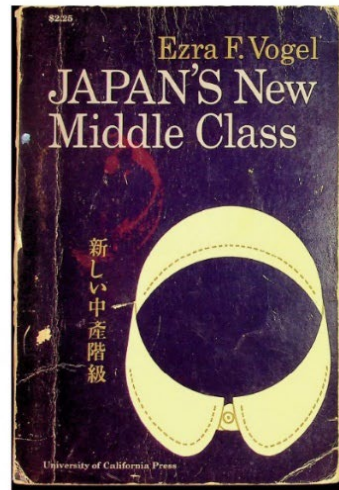


このイラストは、ヴォーゲル先生が 2000 年にハーバード大学を定年退職する記念として日本の学生が集まって本を出版した際にイラストレーターに描いてもらったものです。ところが、ヴォーゲル先生ご自身は引退したつもりはまったくありませんでした。その後、鄧小平の研究、日中関係の研究、胡耀邦の研究など、さらに本格的な研究に精力的に取り組まれたのです。自分の仕事や大学関係の仕事をしなくてもよかったので、ご自分の研究に集中することができたのです。

『日本の新中間階級：サラリーマンとその家族』



1960



1963

ヴォーゲル先生が 2020 年 12 月 20 日に亡くなられてから、私が最初に話をしたのは益尾知佐子先生でした。私たち二人はヴォーゲル先生と大変親しくさせてもらっていましたし、最後のご著書『日中関係史：1500 年の交流から読むアジアの未来』¹の出版にも一緒に関わっていたこともあり、ともにヴォーゲル先生とは頻りに連絡を取り合っていましたので、突然の訃報に接した時にはにわかに信じられませんでした。それはちょうど年末年始休暇の最中のことでしたが、どうすればよいのかわからなくなってしまった私は、手元にあったヴォーゲル先生のご著書を片っ端から読み直すことにしました。20 冊ほどだったでしょうか。全てを読み終えるのには 3、4 週間かかりましたが、このことは私にとって有意義なものとなりました。

ヴォーゲル先生の最初のご著書は 1960 年に出版された家族に関するものです²。この頃の先生はアジアについては何も学んでいませんでした。語学も含めてアジアに関する講義は受講しておらず、専ら家族に関する社会学の研究を進めて博士課程を修了されたのです。そうした先生に向かって、指導教員は「本当の研究者になるためには海外での経験が必要です」と言い、日本行きを勧めたそうです。そうして先生は「アジアの家族」に関する研究に着手し、1958 年から 1960 年まで千葉県市川市で 6 家族を調査して、『日本の新中間階級：サラリーマンとその家族』³と題したご著書をまとめました。この研究活動の中で、

¹ Ezra Vogel, *China and Japan: Facing History*, Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 2019. 益尾知佐子訳『日中関係史：1500 年の交流から読むアジアの未来』日本経済新聞出版社、2019 年。

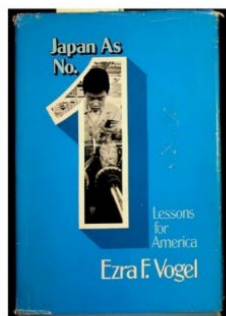
² Norman Bell and Ezra Vogel, *A Modern Introduction to the Family*, Glencoe, Ill.: Free Press, 1960.

³ Ezra Vogel, *Japan's New Middle Class: The Salary Man and His Family in a Tokyo Suburb*, Berkeley: University of California Press, 1963. 佐々木徹郎編訳『日本の新中間階級：サラリーマンとその家族』誠信書房、1968 年。

先生は家族そのもの以上に日本が家族、経済、政治に影響を与えるような変革を遂げつつあることに注目するようになり、その変革を捉えたいと考えるようになったのです。

先生はこの時に調査した家族と親しくなり、彼らのもとを生涯にわたって毎年のように訪問されるようになりました。2019年に愛知大学を訪れた際にも、実はその訪問前に彼らとともに1日を過ごされていました。先生は来日の度に、その家族たちとの時間を過ごされていたのです。彼らは先生にとって日本への入り口のような存在でした。先生は友情、人間関係をとても大切にしていたのです。

『ジャパン・アズ・ナンバーワン：アメリカへの教訓』



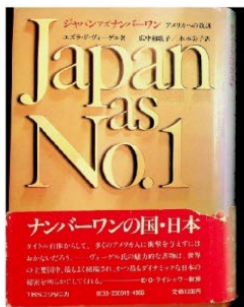
アメリカへの教訓

Japan as Number 1: Lessons for America
Harvard University Press, 1979 (55,000 sold)

TBS ブリタニカ出版、1979 (520,000 sold)

君たちがよりすばらしいアメリカに生きていくことを願って

Dedication: To David, Steven and Eva
May they live in a better America



520,000 x ¥1,300 = ¥676,000,000
FX ¥200 = \$1.00 \$3.4 million

3

話は飛びますが、先生がその人生でなしたことには二つの大きなことがあります。一つは言うまでもなく『ジャパン・アズ・ナンバーワン：アメリカへの教訓』⁴です。日本では発行部数 52 万部ものベストセラーとなり、出版元の TBS ブリタニカに 6 億 7,600 万円をもたらすなど非常に成功しました。しかし、同書の要点は、これが先生の子供たち、デイビッド (David)、スティーヴン (Steven)、エヴァ (Eva) にささげられているということにあります。その日本語版の献辞には「君たちがよりすばらしいアメリカに生きていくことを願って」と書いてあるのです。

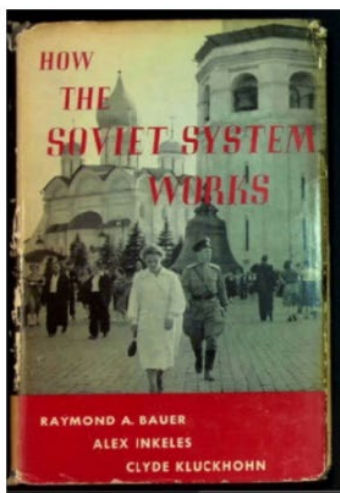
⁴ Ezra Vogel, *Japan as Number One: Lessons for America*, Cambridge: Harvard University Press, 1979. 広中和歌子、木本彰子訳『ジャパン・アズ・ナンバーワン：アメリカへの教訓』TBS ブリタニカ、1979年。

先生はアメリカのことを大変心配されていました。同書はアメリカに対する懸念から著されたものだったのです。クリスティーナ・デイビス教授への先生の最後の問いかけは、「世界が崩壊しつつあると感じたとき、どうすればよいのか」というものでした。先生はアメリカが崩壊しつつあるのではないかとこの危機感を抱き続けていたのです。ケネディ大統領の暗殺、キング牧師の暗殺、またさまざまな暗殺事件、さらに次期大統領として期待されていたロバート・ケネディの暗殺といったような事件が起きてアメリカで希望が失われていた時、先生は日本に希望を見つけることができるのではないかと考えました。

このことは、私たちにとって一つの教訓になりうるものだと思います。現在のように米中間と日中間の関係が悪化しつつあると感じられるとき、私たちはどこに希望を見出すことができるでしょうか。必ずどこかには希望を見いだすことができるはずなのです。

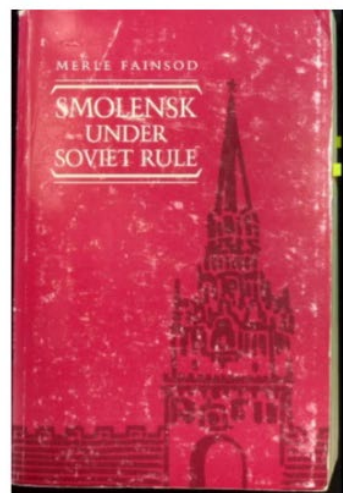
『ソ連支配下のスモレンスク』と『共産主義下の広州』の共通点

The Beginning of Area Studies at Harvard
Russian Research Center (1948)



1956

Raymond A. Bauer 社会心理学
Alex Inkeles 社会学、ロシア語専門家
Clyde Kluckhohn 人類学者、民族学者



1958

Merle Fainsod 政治学者 行政学

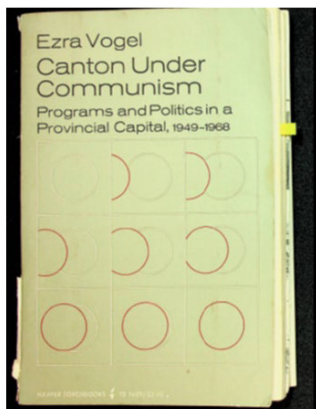
さて、先生の中国に関するご著書『共産主義下の広州』⁵は革新的なものでした。同書は先生がハーバード大学ロシア研究センターの活動から見いだした研究スタイルに基づいています。同センターは1948年に設立されたもので、その活動の成果の一つに『ソ連支配下

⁵ Ezra Vogel, *Canton under Communism: Programs and Politics in a Provincial Capital, 1949-1968*, Cambridge: Harvard University Press, 1969.

の『スモレンスク』⁶があります。同書はハーバード大学が収蔵するモスクワ南方の都市スモレンスクにおけるソ連の統治に関する膨大なアーカイブズに基づいて、先生の友人であるメルル・ファインソードが著したものです。



The East Asian Research Center
(Fairbank Center for Chinese Studies)
1955



1969

『中国の近代史において初めて、社会をコントロールし改革するのに十分な強度のある政治システムを開発したのである。。。。』

『共産主義が広州で行ったことの多くは、解放前の傾向から導かれたものであり、国民党も平和を維持できる政府であれば行われていたかもしれない。。。。』

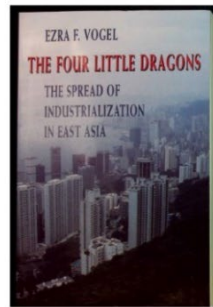
先生は『共産主義下の広州』の前書きの中で、ファインソードとハーバード大学ロシア研究センターが進めた新しい政治体制や新たな政党による統治に関する調査研究を高く評価しています。それは地域を支配する際にどのように教育体制を支配、管理したのか、どのように政治体制を支配したのか、どのように地方政府を支配したのかということをも明らかにするものです。先生は、そうした研究スタイルを用いて中国共産党という新たな政党がどのように広州を支配したのかということをも『共産主義下の広州』というご著書にまとめたのです。その8年前まで日本語も、中国語も、アジアに関しても何ら学んでいなかったにもかかわらずです。

そして、先生はアメリカの中国研究を代表するジョン・キング・フェアバンク (John King Fairbank) 教授からハーバード大学東アジア研究センター (現・ハーバード大学フェアバンク中国研究センター) を引き継ぐことになりました。これは驚くべきことです。先生は同書に社会学者としての視点を持ち込んでいました。

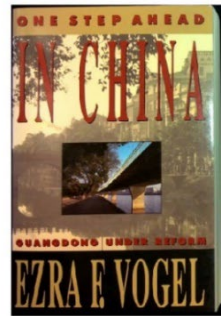
⁶ Merle Fainsod, *Smolensk under Soviet Rule*, Cambridge: Harvard University Press, 1958.

『中国の実験：改革下の広東』

1980s アジアの近代化・工業化 …… (PRCを除く。…)



1991



1989

“By 1988, most of Guangdong’s leaders no longer suffered from illusions. They knew that by international standards their province remained poor and backward....But the pace of change gave them a momentum and a measure of optimism in wrestling with those issues....”

「1988年まで、広東省の指導者たちの多くは、もはや幻想を抱いていなかった。

国際的な基準から見れば、広東省は依然として貧しく、後進的であることは分かっていた……。

しかし、変化のスピードが彼らに勢いを与え、これらの問題に取り組む上での楽観的な考え方が生まれた……」。

6

デイビス教授がおっしゃったように、先生は「東アジアの工業化」(Industrial East Asia)という授業を担当されていたのですが、その授業では日本モデルが韓国、台湾、シンガポールの発展にどのように活用されたのかを考察していました。東アジアの工業化というのは日本がすでに成し遂げていたことの後追いという側面があったのです。

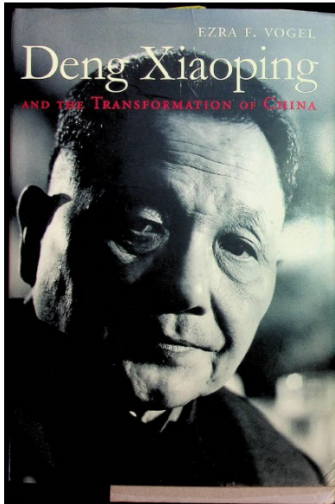
そうした考察を進めると同時に先生は広東省での実態調査を行い、その結果、「広東の指導者たちはもはや幻想を抱いていない」ということを知ることになりました。広東の人々は、自分たちがアジアの他の地域よりも遅れていることを自覚していたのです。そして、先生はそうした彼らに「勢い」(momentum)があることを感じ取りました。日本にできて、シンガポールにもできて、台湾にもできるのなら、広東にもできるかもしれない、というのが同書の要点なのです。

『中国の実験：改革下の広東』⁷はタイミングがまったく悪いものでした。なぜならば天安門事件と同じ年に出版されたからです。そのため同書は多くの読者を得ることができませんでした。

⁷ Ezra Vogel, *One Step ahead in China: Guangdong under Reform*, Cambridge: Harvard University Press, 1989. 中嶋嶺雄訳『中国の実験：改革下の広東』、日本経済新聞出版社、1991年。

『現代中国の父 鄧小平』

現代中国の父—鄧小平 (益尾 知佐子訳)



When Deng stepped down in 1992 he had fulfilled the mission that had eluded China's leaders for 150 years ... enrich the Chinese people and strengthen the country.

1992年に政界から身を引いた時、鄧小平は中国の指導者が150年間、果たせないう使命を達成していた。彼とその仲間たちは、中国の人々を豊にし、祖国を強くする道を見つけたのだ。

But in the process...Deng presided over a fundamental transformation of China itself – the nature of its relations with the outside world, its governance system and its society.

この目標を達成する過程で、世界とその関係、統治構造、そしてその社会のあり方といった中国そのものの根本的変容を達成していた。

そして、『現代中国の父 鄧小平』⁸の出版がありました。先生はハーバード大学を定年退職されると鄧小平に関する研究に取り組みました。鄧小平が中国を変革するために何をしてきたのかを解明しようとしたのです。日本より 50 年遅れ、アジアの他の地域より 20 年遅れたかもしれませんが、鄧小平の変革こそは中国の真の変革だったのです。私は、同書は先生が行った最も重要な学術研究であると考えています。

もう一つ取り上げておきたいことがあります。これは愛知大学による発見なのですが、先生の蔵書の中に『胡耀邦』に関する草稿が残されていました。これは中国を考えるというパズルのワンピースといえます。胡耀邦は中国の改革を前進させた人物ですが、彼が何をしたのかを理解することは、これまでの研究において空白であった部分を埋めることになるでしょう。そして、それは先生の蔵書を受け入れることになった愛知大学によってなされるべきことなのです。

今回、愛知大学に来ることができたことを本当にうれしく思います。愛知大学が先生の記憶とその遺産を生かし続ける取り組みをされていることに感謝いたします。本当にありがとうございました。

佐藤：ダイク先生、ありがとうございました。続きまして、今井先生にお願いしたいと思っています。

⁸ Ezra Vogel, *Deng Xiaoping and the Transformation of China*, Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 2011. 益尾知佐子、杉本孝訳『現代中国の父 鄧小平』上・下、日本経済新聞出版社、2013年。

今井耕介（ハーバード大学政治学部・統計学部教授）

はじめまして、今井と申します。よろしく申し上げます。

私自身の研究は計量社会科学という分野で、アジア研究とは離れていますが、今、ハーバード大学政治学部と統計学部で教授をしております。

計量社会科学：「質的な研究」と「量的な研究」

計量社会科学はどういうものなのかと、皆さんに思われるかもしれませんが、基本的にはデータを研究して社会の問題を分析するという分野になります。それで、ヴォーゲル先生の研究というのは、いわゆる「質的な方法」を使われて、先ほど皆さんがお話しになっていたように、インタビューや面談など、いわゆる一次資料などを使って研究するという質的なやり方だと思いますが、それはだいぶ私がやっているような、データを分析してプログラムを使ってやるというのと違う研究の手法になります。

ただ、今回少し強調しておきたいと思ったのは、その「質的な研究」と「量的な研究」を一緒にやることによって、社会科学の学問あるいは政策などにおける提言ができるのではないかということです。それはなぜかということ、今、アメリカの大学では統計学やコンピュータサイエンスの分野が学生に非常に人気だからです。例えば、私が大学院生だった2000年代前半には、ハーバード大学の学部生の中で統計専攻の者は1人しかいなかったのです。全学で1人だけ、統計を専攻している人がいました。ただ、それが今になると、200人を超えているようになり、やはり時代の流れとともに学生の興味なども変わってきています。

今、AIについてはみんな騒がれていますけれども、そういうことが庶民の生活にもどんどん影響を与えています。今はビッグデータの時代ともいわれていますが、そうした流れの中で、社会と計量分析やコンピュータサイエンスとの関わりが非常に大きくなっていると思います。

それで、さきほど携帯でエズラ・ヴォーゲル先生のことをChatGPTに聞いてみたのですが、「エズラ・ヴォーゲルさんの貢献は何か」と聞いたら、「エズラ・ヴォーゲルは日本研究において重要な貢献をしました。特に注目されるのは、彼の著書『ジャパン・アズ・ナンバーワン：アメリカへの教訓』です。この本では、日本の経済的成功の要因について、従来の考え方に疑問を投げかけ、日本とアメリカの理解を促進しました。」というふうにもうすぐ出てきて、すごいと思いました。

ものすごい時代になってきたのですが、その中でやはり強調したいのが、質的な研究手法の重要性です。今、社会科学の研究、例えば、私がやっているような研究は昔とかなり違うようになりました。昔は、たぶん政府が出版した統計を分析していたのですが、今は、例えばさまざまな地理的なデータや、あるいは携帯を使うときの履歴のデータなど、そういういろんな人の生活や人の考え方に関するかなり細かいデータの分析が行われています。

そうすると、それをコンテキストなしで分析しようとすると、何も分かってきません。それは、どのようにデータが集められたのか、それらのデータがどの国でどう使われている

るのかということを知らずに分析しようとする、とんでもない結論を導くことになるということがあります。やはり計量社会科学をやっている身からすると、そういう質的な理解というのが非常に重要になっていると思います。

アフガニスタンの世論調査

それで、自分の研究でもアフガニスタンの世論調査などをやっておりました。その研究においても、アフガニスタン研究を専門にされている方と共同で進めています。彼はダートマス大学の教授で、別に統計を専門にされているわけではありませんが、アフガニスタンになん回も足を運んでいて、そこの言語も話せるし、そこの人たちもたくさん知っています。そういう人たちと私みたいなデータを分析する人が一緒に研究することによって、ただ単に回帰分析を走らせるだけではなくて、もう少しニュアンスの取れた統計分析の結果が得られることになります。

例えば、この分析をしているときに、なにか1つの村が少し変わった村で、どうしてこの村は他の村と比べて世論調査の回答率が低いのかと聞いたら、私の共著者がその村の人はタリバンの支持者で、そのことを村の住人たちは分かっている、タリバンの支持率を聞こうとすると、そういう世論調査にはあまり答えなくなるということを教えてくれます。そういうのは実際、その国をよく知っている方じゃないと分からないので、これから学問の分野だけではなく、政策に関わるような形であっても、そういう質的な理解と量的な分析をうまく組み合わせることで、もっとちゃんとした知見が得られるのではないかと思います。

「ヴォーゲル塾」

それで、私自身はヴォーゲル先生の学生でもなく、2018年からハーバード大学で教鞭を執っているのですが、それ以降、何回かお会いして、一緒に食事をしたり、ある時はタクシーと一緒に乗ったりして、そういう感じのインフォーマルなヴォーゲル先生との接し合い方をしておりました。

実は、私がずっと興味を持っていたことは、先ほども取り上げられていた「ヴォーゲル塾」です。先生がどうしてそんなことをやっているのかなと思って、ヴォーゲル先生に聞いてみたら、「それはなぜかという、やはり日本の官僚なり、学生なり、日本の人たちに自分の意見を英語でちゃんと発表できる力を身に付けてもらいたいから」と、彼はおっしゃっていました。彼に言わせると、それはただ単に英語で言うだけではなくて、自分の考え方をちゃんと相手に伝えるとか、相手を説得させるということの大切さを彼はすごく強調しておられまして、私はなるほどと思いました。

「親を説得する」

それはなぜかという、私は大学まで日本で育ったのですが、日本の教育というのは自分の考えていることを伝えるとか、相手を説得するとか、そういうことがなかなかやられていません。アメリカに行ってみると、うちの娘がアメリカで育っているのですが、小学校2年生の時のエッセイの課題は、親を説得したいことはないかというのがありました。それを1年かけて、親になぜそれをすべきなのかということを書くという課題がありました。彼女は庭の木のところにツリーハウスという小さな小屋を取り付けてほしいというとてもない願いがありました。それでは、なぜそれをすべきなのかというのを3つも4つもちろんと理由を付けてきて、それを使って親を説得しようとしていました。

アメリカではそういう教育訓練を小さい頃からしているのですが、日本ではそういう機会がなかなかありません。国際的に活躍する場合は、自分の思ったことをどうやって相手に正確に伝え、相手の意見をくみ取って理解し、さらに、どうやったら自分の意見を出して相手を説得できるかということがすごく大事だと思います。

ヴォーゲル先生の話の話を聞いていると、その人と人とのやりとりや交渉の仕方というのがすごく大事なのだと分かりました。今後、私も統計などテクニカルなことを教えていくと同時に、自分の分析結果をどうやって相手に伝えるのか、そういうことをもっとしっかり教えていかなければならないと自分でも思います。ヴォーゲル先生には、そういう統計では分からないようなことの大切さを教わりました。

勇気を持って海外に出ていく

最後に、日本人の学生もいっしょと思うので、先ほどデイビス先生もおっしゃったように、日本人留学生の数が減っていることが若干気になります。ここにいる日本人の学生はこういうことに興味があつて来ていると思うので、ぜひ言葉とか、英語とかあまり気にせず、自分にしかできないこと、自分が興味を持っていることをもっと前面に出して、アメリカにチャレンジして、海外のいろんな国にチャレンジしてほしいと思います。

私自身もずっと日本で育っていて、英語は全然駄目だったのですが、大学3年生の時に、そこに座っていっしょにいます益尾知佐子先生と一緒に交換留学に行きました。その時はもう言葉も大変で、大変な思いもしました。でも、そこからいろいろ勉強して、今のハーバード大学で教えるという機会を与えられているので、あまり将来のことを考えないで、勇気を持って海外に出ていくということは非常に大事です。

ヴォーゲル先生もそういう信念で国際交流を続けてほしいと願っておられると思いますので、若い人にはぜひ頑張ってもらいたいなと思って、今日はここに来ました。こんなところで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

佐藤： どうもありがとうございました。今日は愛知大学の学生も多数参加していると思いますけれど、力強いお言葉を頂きまして、ありがとうございました。それでは、続きまして趙先生、よろしくお願ひします。

趙全勝（Zhao Quansheng、アメリカン大学国際関係学部教授）



皆さん、こんにちは。このような意義深いイベントを開催していただき、ありがとうございます。この場で多くの古い友人たちにお会いすることができたこと、さらに新しい友人たちと知り合うことができたことを本当にうれしく思います。そして、李春利さんと皆様のご尽力によって、かくも素晴らしいイベントが開催できたことにお祝い申し上げます。

私が初めて日本に来たのは 42 年前のことです。その時は、北京大学からカリフォルニア大学バークレー校に向かう途中でしたので、3 日間しか滞在できませんでしたが、今回はこのイベントに参加させていただいたことで愛知大学に来ることができました。

今回、私がお話ししたいことは二つあります。一つはエズラ・ヴォーゲル教授について、もう一つは私自身の東アジアにおける中日関係についての考えです。

ヴォーゲル教授については、「做人」「做学问」「做政策」という三つの中国語の言葉にまとめることができます。「做人」は素晴らしい人になること、「做学问」は良い研究をすること、「做政策」は政策問題に関わるということです。


まず「做人」について。私の恩師であるロバート・スカラピーノ（Robert Scalapino）教授は東アジア国際関係論を講じておられ、私はそのティーチング・アシスタントをしていましたが、その授業では『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が使われていました。その次の年、私はチャルマーズ・ジョンソン（Chalmers Johnson）教授のゼミで日本の政治と外交政策を学びました。その後、私は東京大学の客員研究員となり、東洋文化研究所や国際文化会館で1年を過ごしたのですが、その頃、私は初めてヴォーゲル教授にお目にかかりました。

ヴォーゲル教授は素晴らしい教育者であり、多くの教え子を抱えておられました。先ほど「ヴォーゲル塾」のことが話題になっていましたが、私がポスドク研究員としてハーバード大学で1年を過ごした際、ヴォーゲル教授は中国や日本、韓国から来た多くの研究者

とともに私をご自宅に招待してくれました。そこでは、私は素晴らしい時間を過ごしたのです。

傑出した人柄


- 桃李天下に満ち、後進の学者を育成。
- 1993－1994年：ハーバード大学にポスドクとして滞在中、ヴォーゲル邸で交流を深める。
- 中国語－英語／日本語－英語を自由自在に切り替える。
- 好奇心、共鳴、平等
- 生きる限り学び続ける。



次に「做学問」についてです。ヴォーゲル教授は英語、日本語、中国語を切り替えながら話されていました。私が英語で話すと中国語で返してくださったりしました。私が接したヴォーゲル教授は本当に好奇心旺盛な方で、また相手が若い研究者であっても対等の立場で接して下さる方でした。中国語には「活到老、学到老」という言葉があります。生涯を通して勉強し続けるということです。これはヴォーゲル教授その人を表すかのようです。

学問の研鑽

- 研究成果を世に問い続ける。
- 中国研究と日本研究の大家
- 現地調査を重視する。
- 学際的、多分野、複眼的視角




そして、ヴォーゲル教授は優れた研究者でもありました。このことについては先生方がすでに説明されていらっしゃるから繰り返し述べることはしませんが、次の二つのことは強調しておきたいと思います。

一つは、ある国の文化、歴史、言語を研究するために現地調査に多大な注意を払っておられたということです。ヴォーゲル教授は中国語と日本語の両方で流ちょうに講義ができるアメリカでも数少ない研究者の一人でした。もう一つは、ヴォーゲル教授の研究は学際的であり、本物のアジアの専門家だったということです。ヴォーゲル教授の研究については、中国と日本に関するものがよく話題になりますが、実は韓国についても研究されていました。私は東アジア国際関係論を教える際、そのご著書を用いています。私がここで言いたいのは、ヴォーゲル教授は本物の東アジア専門家であり、私たちが研究対象としなければならない人物であるということです。先ほどジェームズ・ロブソン先生がヴォーゲル教授の東南アジアについての取り組みについて言及されていましたが、それも大変重要なことです。

さらに「做政策」について。ヴォーゲル教授は早くから政策立案に参加されていました。1993年から95年にかけてアメリカの国家情報会議で東アジア担当官を務められています。このように政策に関わるヴォーゲル教授というのは私の研究対象となりました。

政策を立案する



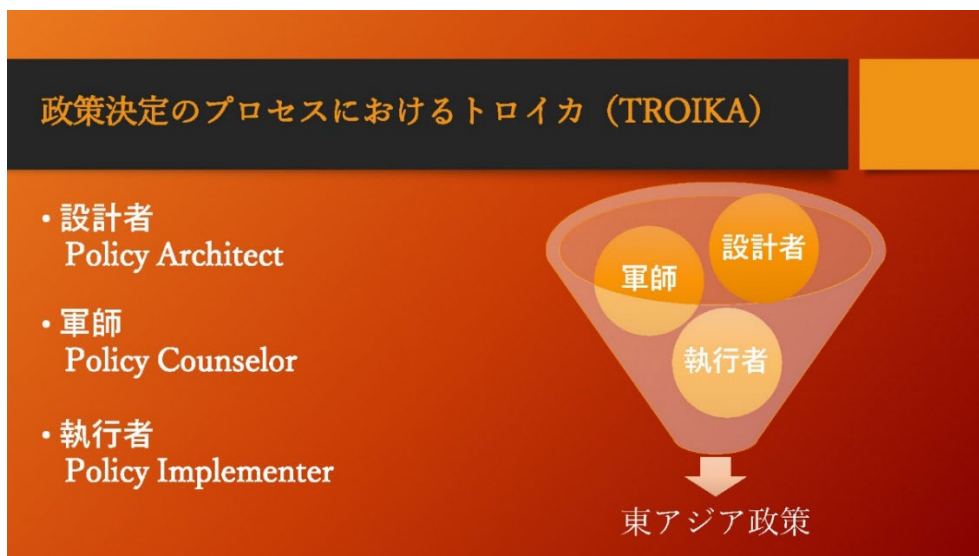
- 1964－2000年
ハーバード大学教授、フェアバンクセンター所長、ハーバードネットワーク (Harvard Network)
- 1993－1995年
回転ドア：アメリカ国家情報会議 (NIC) 東アジア担当。

昨年、私は *Great Power Strategies : The United States, China and Japan*⁹ (大国戦略：アメリカ、中国、そして日本) という英語の研究書を出版しました。同書ではヴォーゲル教授をアメリカの外交政策決定プロセスにおける、いわゆる「学者型官僚」(scholar official) として捉えています。

⁹ Quansheng Zhao, *Great Power Strategies: The United States, China and Japan*, Routledge, Taylor & Francis, 2022. 中国語版：趙全勝《中美日大國戰略比較研究》，五南圖書出版股份有限公司(台湾), 2019年。



私の研究では、政策決定に関わる政策立案者、政策顧問、政策実行者を「政策決定プロセスのトロイカ」（TROIKA）と呼んでいます。その中にヴォーゲル教授は「学者型官僚」として参画したのですが、それは日本と非常に深い関係が認められるものでした。1980年代後半から1990年代前半にかけてアメリカで優勢だった「ジャパン・バッシング」（Japan Bashing）が、その後、日本重視へと移行していった際のアメリカの外交政策チームというのは、専門家によるグループ（mandate group）だったのですが、そこには東アジアの専門家としてヴォーゲル教授が政策顧問として加わっていたのです。ヴォーゲル教授は研究者であると同時に、実務家でもあったのです。実際、積極的に政策論争に参加しておられました。



さて、中曽根康弘は、その晩年、米中関係の悪化を見て「アジア・ウェイ」という言葉を使いました。それは外交政策における「東アジア方式」という意味です。中曽根と胡耀邦の関係については、ヴォーゲル教授の最後の研究（『日中関係史』）で取り上げられています。1980年代、当時の中曽根首相と胡耀邦総書記による日中関係は興味深いものでした。中曽根首相の時代には、3,000人余りの日本の若者が中国を訪問しています。その中には菅直人さんや野田佳彦さんがいました。そして、中曽根首相は、「私の友人である胡耀邦を政治的な困難に巻き込むようなことはしたくない」と語って靖国神社参拝を中止しています。この非常に興味深いことから、信頼が大変重要であるということがわかります。日中間においては相互信頼が鍵になるはずですが、今日においてはそれが欠けています。

中曽根康弘の「東アジア方式」


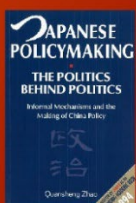

- 胡耀邦総書記が3000人の日本青年を中国に招待
 - 1984年：胡锦涛、菅直人、野田佳彦—中曽根氏をホームパーティに招待。
- 中曽根氏、靖国神社参拝を中止
 - “東アジアの問題を解決するためには「東アジア方式」で対処”。



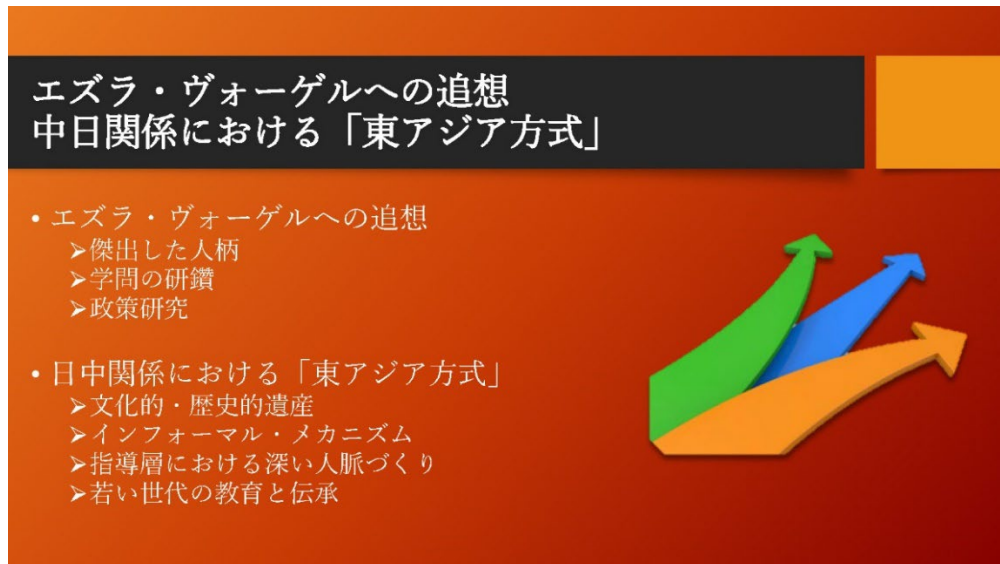


中日関係における「東アジア方式」

- 文化・歴史的遺産
 - 福田康夫の“温故創新”、“靖国神社を参拝しない”
 - 仁、義、理、智、信⇒義理を重んじ、約束を守る
 - 信用があれば大事も小さくなるが、逆も同じ。
 - 過去を忘れないことは、未来への鏡
- インフォーマル・メカニズム
 - “付き合い” “黒幕” “根回し”
- 首脳外交
 - RCEP
 - 中日韓サミット
 - 習近平訪日：202X？ 中日国交正常化50周年？
- 若い世代の教育と伝承

このような事例から、私は日本の政策決定を理解するために『日中関係と日本の政治』¹⁰ という研究書を出版しました。そこではリーダーシップ、外交、インフォーマルなメカニズムを取り上げ、その際、「付き合い」「黒幕」「根まわし」という三つの日本語の概念を用いました。



では、最後に一言。私は、ヴォーゲル教授は優れた人物であり、優れた教育者でもあり、また優れた研究者でもあり、さらに政策実行者でもあったと思います。その事績をしのびながら私は研究を進めていきたいと思います。どうもありがとうございました。

佐藤：趙先生、ありがとうございました。それでは引き続き、益尾先生、よろしくお願ひします。

益尾知佐子（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）

皆さま、こんにちは。九州大学の益尾知佐子と申します。

本日、エズラ・ヴォーゲル先生を記念するために、与えられたテーマは「アジア研究の過去・現在・未来」でした。私はありがたいことにヴォーゲル先生とは深い関係に恵まれましたが、今日がご自分を称えるばかりの会になったら、たぶんヴォーゲル先生は喜ばないだろうという気がします。それでこの機会に、これからアジア研究を実際に進めていかれるかもしれない皆さまに、今、私たちがどういう問題に直面しているのか、それをこれからどういうふうに乗越えていくべきなのかということを考えていただけるとよいなと思いました。しかし、その全体を話す技量はありませんので、まず私自身の中国研究のお話をさせていただきます。

¹⁰ Quansheng Zhao, *Japanese Policymaking: The Politics behind Politics: Informal Mechanisms and the Making of China Policy*, Oxford University Press/Praeger, 1993. 日本語版：趙全勝『日中関係と日本の政治』、杜進、柄内精子訳、岩波書店、1999年。

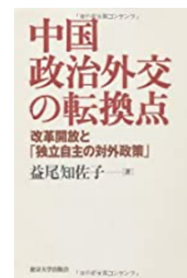
中国研究が直面している課題

米中関係と同様に、日中関係は今、大変難しい局面にあります。だからこそ、中国のことを理解する必要がありますが、研究手法自体が非常に制約を受けるようになってきています。そのようなときどうすべきかを考えたいと思います。私は過去20年間ぐらい、中国という常に移り変わる研究対象をどう追いかけていくのか、どんな文献を論拠にどのように論理を組み立てていけば学術的な研究を続けていけるのか、という問題を考えてきました。今日はその一端をご紹介させていただきたいと思います。

益尾知佐子 自己紹介

- 東京大学教養学部卒業、同総合文化研究科で博士号
- 日本国際問題研究所研究員、E. F. ヴォーゲル研究助手、早稲田大学講師などを経て
- 2008年から九州大学大学院 比較社会文化研究院 教授
- 2021年11月 中曽根康弘賞優秀賞受賞（中国海警法批判）
- 2022年9月から九州大学大学院 教授
- 現在、日本国際問題研究所客員研究員、海上保安大学校客員教員、日本経済新聞電子版・Yahoo! JP Newsコメンテーターなど兼任

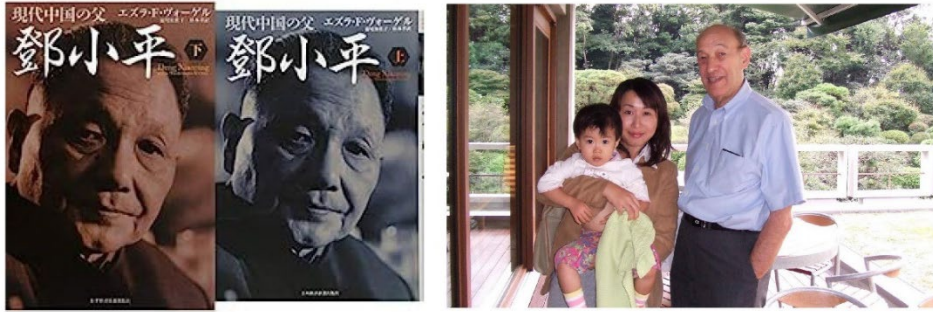
- 専門：中国外交、国際関係論
- 2014-15年、ハーバード大学イエンチン研究所で協働研究
- 2019年には中国で計6ヶ月間、訪問学者（中国社会科学院、外交学院）
- 博士論文のテーマは、中国の隠された外交転換（革命外交の放棄）。執筆中に中国共産党の党史研究の手法を学ぶ。現在も党や政府組織の文書の読解を好む。
- 長年、中国内外で中国外交に関する聞き取り調査も続けている。



日本全国でいろいろな中国研究者が似たような問題に直面しているので、今日お話しするのは私個人の一事例です。私は元々、今井耕介先生と一緒に、東京大学教養学部で国際関係論を勉強してきた人間です。ちょうど私たちが教養学部教養学科にいたころに作られた交換留学プログラムで、北京大学に派遣してもらいました。その時からずっと中国の対外政策を研究してきております。ただ最近では、日本国内では中国をめぐる海洋問題の研究員として知られているようです。

上司と部下、研究者としての恩人

ヴォーゲル先生との関係：上司と部下
だが先生は研究者としての私の命の恩人



李春利先生のほうから、ヴォーゲル先生と自分の関係性も話してほしいという依頼を受けました。ヴォーゲル先生はあまりに偉大な人なので、私は普段、できるだけ言わないようにしているんです。今日はこのような機会ですのでお話すると、私は2年半ぐらいヴォーゲル先生のリサーチ・アシスタントをしておりました。それはちょうどヴォーゲル先生が鄧小平に関する本を書き始めた頃でした。お示したこの写真は、私がお仕事を終えて、日本に帰ってきた時のものです。ヴォーゲル先生が東京でいつも泊まっていた国際文化会館で撮りました。ここに写っている子供は今、18歳でもう受験生です。私はヴォーゲル先生とは上司と部下の関係でしたが、ああいうお人柄なので、私はヴォーゲル先生に研究者として育てていただいたように感じております。

日本に帰ってきて、私個人は研究者としてうまくいかないことが多く、相当ふさいでいた時期がありました。私が日本で認められるようになったのは相当遅かったですし、通常であれば途中で研究をやめてもおかしくない状況がありました。しかしヴォーゲル先生は、研究というのは社会のためにあるのだから、あなたは絶対に研究を続けなければいけない、あなたこそが日中関係をつなぐのだと私に言い続けていました。それは彼の信念でもあったのだと思います。その力があまりに強くて、私は研究をやめるにやめられなかったのです。というわけで、私が今日、研究を続けているのは彼のおかげです。

『現代中国の父 鄧小平』と『日中関係史』の翻訳

その後、ヴォーゲル先生が書かれた『現代中国の父 鄧小平』と『日中関係史』（いずれも日本経済新聞出版社）という2冊の本は、私が翻訳することになりました。翻訳は本当に大変でした。ただその過程を通して、ヴォーゲル先生には研究者としていつもエネルギーを与えていただきました。

先ほども述べましたように、ヴォーゲル先生は、研究による社会貢献ということを強烈に意識されておられました。ですが、現在の日本で中国研究を続けるのは、研究の手段も

狭まってきているし、しょっちゅう社会の批判にさらされるし、けっこう骨の折れる作業になっています。しかも、政府もそこにまったく注力していません。ただし、日本の外交も安全保障も、現実には中国を念頭に政策が作られているわけです。ところが日本政府の中には、中国を長年見続けて、その研究を専門にしているような人材はいません。これは日本の制度設計がそうなっているからです。また社会の中には中国への反感とか反発も強く、ナショナリズムがくすぶっています。そういう中で、数は多くないですが一部の中国研究者は、自分たちが中国を分析し続けること自体が日本の安全保障に直結するのだ、という意識を持つようになってきていると思います。政府やメディアが時間をかけて真正面から見ようとしない問題を、自分たちが続けていくのだ、という気概です。それによって、今の難局をなんとか乗り越え、時期が来れば再び中国とも関係をつなぎ直して、自分たちが国際関係を築いていくのだ、それが自分たちにできる社会貢献なのだと思っている仲間が、結構いるような気が私はしております。

研究と社会

- ・ヴォーゲル先生は研究による社会貢献を強烈に意識
- ・今の日本では、数少ない中国研究者が中国を分析し続けること自体が安全保障
- ・日本の研究者は習近平後も考えながら研究（国際秩序を自分が作る、という気概）
- ・「中国はわからない」？
過去15年ほどのおかしな実感
「自分の予想はよく当たる」
→なぜ見えるのか？
（地域研究者はやはり必要、と言いたい）
- ・ベースは指導者の脳内と社会文化への理解
そこに多少の動向分析を加えるだけ

「沖縄独立」
中国の統一戦線工作に注意
今月のお読み
益尾 知佳子
【毎日新聞】2023年6月22日

先ほど今井先生のほうから計量的な研究や質的な研究という話がありましたけれども、他方で私は地域研究者も必要だと思います。よく政府の方々やメディアの方々が、中国は分からないと言います。でも私はそうは思わないのです。偉そうですけど、私にはほぼ確実に動きが分かるのです。例えばここにちょうど先週、『毎日新聞』に寄せたコラムを出していますけれど、今、中国が日本に関して一生懸命やっているのは「統一戦線工作」で、沖縄独立運動をけしかけてきているなどというの、手に取るように見えるのです。世界のいろいろな国々を研究し続ける地域研究者の存在は、例えば日本にとっても日中関係にとっても、結構役に立つのだと思うのです。

中国研究の手法：変化の連続

実は私、無名だった10年間くらいずっと黙っていたのですが、その間も中国は次にごういうことをやるのではと考えながら、中国をずっと観察していました。で、自分で言うとう自慢しているように聞こえるんですが、私の予感がすごく当たるということに、10年経ってやっと自信が持てました。中国の次の政策の方向性くらいは簡単に予想できるんです。世の人たちがわからないと言っているのに、なんで私は分かるのか。考えてみたら、ベースはやはり自分が博士論文を書いている時に受けたトレーニングにあるんです。つまり、自分の頭の中に中国の指導者の脳内の思考パターンが入っているようなんです。そして、それを支える中国社会や文化のようなものも、中国の友人たちに教えてもらって肌でよく知っている。そこに今、中国がこういう動向を示しているというような、新聞やネットで取れる情報をいくつか加味すると、中国は今ではどっちの方向に向いている、これがそのまま進めば将来はこういうふうになるといったことが、かなりきれいに予測できるんです。中国という大きな箱の中で、少数の指導者が全体にわたる決定をするという条件は、建国以来ずっと変わりません。だから長年それを見てきた研究者には、そういう読み解きが自然にできるんだと思います。

ただし、中国研究の手法は変化の連続 益尾の事例①：中国でのインタビュー

- 1996年に北京大学に交換留学
(1年間、東大派遣第2期生)
→「遊学」で中国人の考え方を学ぶ(友人の助け)
- 1999年に修士論文執筆
テーマは中国と朝鮮半島の関係
→インタビューに味をしめる
中朝国境でミニ現地調査も



とはいえ、中国研究の手法がずっと変わらないわけではありません。中国はダイナミックに変化する国なので、研究者はみな、時代に応じていろいろ試してきたと思います。研究手法上の変化を、私の事例でご紹介しましょう。私自身は先ほど申し上げたとおり、学部時代に中国に1年間交換留学に出ておりました。その後、日本に帰ってきて、1999年に修士論文を執筆していたのですが、この時、ここで一緒に写真に写っている方と折良く出会うことができました。この方は中国外交部の元・朝鮮語通訳でした。この方にインタビューをして、中国の政策執行者の仕事のパターンや考え方のようなものを親身に教えてい

いただきました。つまり、私はインタビューに大きく依拠しながら、研究に入ったという形になります。

益尾の事例②： 冷戦史からの学び

- 2001年からもう1年間、北京大に留学（江沢民末期の自由化時代）
- 世界の冷戦史の流れの中で、中国の党史研究者が海外の外交記録を使って中国当局の歴史観を真っ向から批判中
- 中国当局も外交文書を次々に公開
- 文字で裏付けをとりながら、改革開放初期の中国の秘密の外交転換について博論執筆（書き終わったのは2008年）→このとき毛沢東・鄧小平の脳内パターンをコピー



2002年に北京大学で、歴史家の牛軍先生（中央）と沈志華先生と一緒に

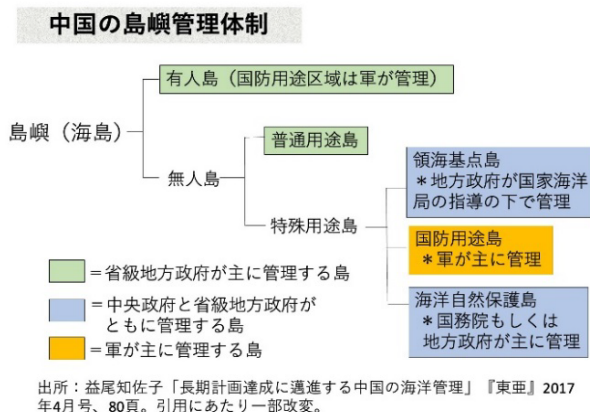
その後、2000年から2001年にかけて、北京大学に再留学しました。世界の冷戦史研究に乗って、当時中国では歴史研究者が次々と重要な研究を発表していました。彼らのほとんどは、元々共産党の歴史を研究している人たちだったのですが、世界の冷戦史研究の波を受け、自分の研究をそれと融合させて、中国共産党の歴史観に非常に批判的な見解を発表していました。毎日、北京大学のセミナーではほとんど喧嘩かというような激論が展開されていて、留学生としてはそれを見ているのが楽しくて仕方ありませんでした。私はこの人たちからは歴史資料の使い方、読み解き方を教えていただきました。

ヴォーゲル先生のリサーチ・アシスタントへ

その後、ヴォーゲル先生のリサーチ・アシスタントになり、ハーバード大学で資料をあさったり、中国で集めた資料を読んだりしました。おかげで博士論文も書けました。当時は新しい資料もどんどん出てきていましたので、その間に、私は毛沢東や鄧小平の脳内の思考パターンのようなものを、たぶん古い資料からコピーしたのだと思います。この時の経験というのは今、非常に役立っています。

益尾の事例③：中国の行政文書分析

- ふたつの尖閣事件（2010年、2012年）で、日本人にとって中国でのインタビュー調査は極めて困難に（2010年代前半は経済協力に関する問題はまだよかった）
- 中国の海洋政策を理解するため、情報公開に積極的だった胡錦濤政権の姿勢を活用し、国家海洋局が構築していた海洋統治システムを解読



でもその後、中国はどんどん閉鎖的になっていったのです。まず日中関係が悪くなって、インタビューは非常にしにくくなりました。日本人というだけで面会が断られるのはしょっちゅうでした。私は最初、インタビューから始めていたので、このころはどのように研究を続けていくのか本当に悩みました。ただし江沢民時代から胡錦濤の時代には、政府の仕事の透明化が意識されていたため、当時はまだ国務院関係の資料は活用できる状態でした。日本人は漢字を読むのは平気なので、私は行政文書とか法律文書をひたすら読むことにしました。このスライドの右側は中国の島の管理体制で、中国が南シナ海での埋め立てを行う際の国内根拠になったものです。中国の行政文書の読み解きから、埋め立てがどのように実施されたかなども分析できました。

益尾の事例④： インタビュー → 中国がダメなら海外へ

- 習近平時代、中国は外交檔案館を外国人に閉ざし、内部資料の管理を厳格化し、法的罰則も整備
- さまざまな組織からインタビューは拒否される
- 化石採集からのヒント
→ 中国が海外で何をしているか、どう見られているか、中国の周辺国を回って調査（ロシア、中央アジア、インドでの経験は今後を考える上で特に有効）

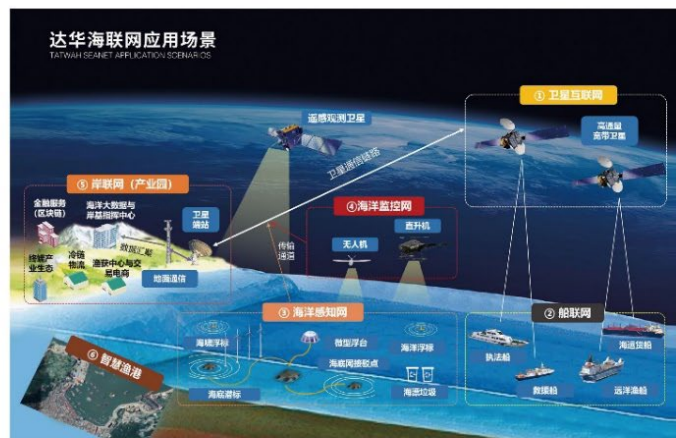


中印係争中の町、Tawangに入る峠で。標高4176m。2013年ごろ

そこから中国の海洋政策を読み解いていったのですが、それに同時並行して、中国の周りの国を回って、中国がなにをしているか、人々が中国に対してなにを思っているかというのを考えるようになりました。私は昔、化石を採集していたのですが、化石って生物の死骸の部分だけではなく、その形が残っている外側の土の部分も化石と呼ぶんです。だから、中国の内側深くに入れないのなら、中国が世界でなにをしているかを外側から読んでいけばよいと思って、こういう調査をやっておりました。

益尾の事例⑤：中国の科学論文分析

- 2018年の組織改革で、国家海洋局は解体、中国海警局は中央軍事委員会の統制下に（→分析はさらに困難に）
- 残る「民との接触部分」は？
→漁業
- 中国の漁業改革を研究をしている間に、それが宇宙・空・海・陸をつなぐ壮大な観測監視網の構築計画の一部と発見
- CNKIで中国語の科学論文を集めて計画を読み取る
- 気球事件でCNKIの利用も不安定に



Tatwah Group's self-introduction on its core business;
<https://www.twh.com.cn/html/business/satellite.html>

そうこうしているうちに、元々自分がよく研究していた「国家海洋局」という組織が 2018 年の組織改革で解体され、中国のコーストガード、つまり「中国海警局」が「中央軍事委員会」の統制下に入ってしまい、資料が読めなくなりました。仕方がないので、今度は理系の科学技術論文を読むようになりました。中国は情報をどんどん閉ざしていますが、民間に近い部分はどうしても情報公開が必要なので、一番情報が出ます。なので当初は、海の問題を読むために中国の漁業改革の研究をしていたんです。ところがそれをやっているうちに、中国の漁業政策が中国が今構築している、宇宙、空、海、陸をつないで地球を取り巻く観測監視システムの一部だというのが分かったのです。それで科学論文を読み始めたのですが、この間のアメリカでの気球事件で、そういう論文を載せていた CNKI というデータベースが使えなくなる可能性が出てきて、今また新たな不安定性に悩んでいるところです。

中国研究とアジアの未来

中国研究とアジアの未来

- 中国理解の重要性は年々高まる（リスクがあるからこそ）
- しかし中国では次々と拘束事件が発生、日本人研究者も
- 研究の手段はますます限られる
 - 次は1960-70年代の内容分析への回帰か？
- 大学の資源の枯渇、就職はきわめて不安定、社会的責任の大きさにもかかわらず社会的ケアなし、制度的支援ゼロ（政府に無償奉仕）
 - 大型中国研究は20年間なく、国立大学には1つも研究センターなし！
 - 笹川平和財団などの日中交流事業に頼るのみ
- 日本人の若手中国研究者は絶滅の危機、学生は中国人+その他外国人

➤ 日本の将来的存立の問題では？

こんな感じで、中国研究者たちはその時々利用可能なものを使って、なんとか研究し続けてきています。研究対象がどんどん変化するので、いつも新しいことを勉強しています。今困っているのは、ご存知のとおり、中国で次々と拘束事件が発生していて、私たちがもう中国に行けない状態になってきていることです。研究者仲間では今後は、かつて1960年代や70年代に使っていた『人民日報』などの記事の内容分析を、今の技術を使って計量的にやるしかないのではないかというふうに言っています。もう本当に、こんなに体力を使う研究分野はないと思います。

他方、大学の資源が枯渇してきており、就職難が続いています。そして、社会は当たり前前に私たちに意見を求めてくるけれど、研究に対する支援はゼロという状態が続いています。実は日本では、大型の中国研究なんてもうずっと行われていませんし、中国研究者は科研費も取りにくく、交流や研究の継続そのものが難しくなっています。中国が難しい問題になっているのに、日本の大学院は自費ですし、そこに何年も通った挙句、就職できるかどうか分からないので、日本人の20代から30代の中国研究者はほぼ絶滅しています。これは非常に大きな問題になってきており、もしエズラ・ヴォーゲル先生が生きていらっしゃったら、たぶん新たな制度を構築してこの問題をどうにかしていくようにおっしゃるんじゃないかなと思います。また、彼はたぶんどんな困難な状況でも、中国側と対話を続ける手法を探せともおっしゃるでしょう。そういうことが、私たちには新たな宿題になってきていると思います。ご清聴ありがとうございました。

佐藤：益尾先生、ありがとうございました。それでは、先ほどご講演いただいたデイビス先生、それから午前中にご講演いただいたロブソン先生に追加でなにかコメントがあれば、お願いしたいと思います。デイビス先生は特になんかということですので、ロブソン先生にお願いいたします。

ジェームズ・ロブソン (James Robson、ハーバード大学アジアセンター所長)

素晴らしく、またとても興味深い報告をありがとうございました。ヴォーゲル先生についてはもちろん、現在のアジア研究の状況についてもたくさんの知見をいただきました。その中にはとても重要なことがいくつもありました。

その中で特に重要だと思ったのは、ヴォーゲル先生が、日頃、普通の市民から大統領に至るすべての人々に対して先入観をもたずに接することができたということです。私がハーバード大学に赴任してアジアセンターに入った際、ヴォーゲル先生は私のことをご存知ではありませんでした。先生のお知り合いの方々に比べれば私などは何者でもなかったのです。けれども先生はまるで部屋に二人しかいないかのように、そして私がさも重要な人物であるかのように誠実な姿勢で私の話に耳を傾けてくださいました。こうした素晴らしい人間性は先生の研究にも表れていると思います。

フィールドワーク、そして CNKI

また、先生の研究におけるフィールドワークの重要性についてですが、リチャード・ダイクさんがおっしゃったように、生活をともにするようなフィールドワークとは異なる方法で、先生は政策立案者としてのフィールドワークや研究者としてのフィールドワークを行っておられました。そして、趙教授のご報告では、ヴォーゲル先生そのものをフィールドワークの対象として使おうとしていらっしゃいました。

これは非常に重要なことです。政策に貢献するという考え方は、特に今のアメリカでは大変重要なものだと思います。先週、アメリカの大統領候補の一人であるフランシス・スアレス (Francis Suarez) というフロリダ州の市長がウイグル人についての質問を受けたのを見ていたのですが、なんと彼は「ウイグル人とは何ですか」と言ってきました。アメリカの最高権力者の候補者たる人物がこのように無知であることは信じられないことです。まったく恥ずべきことです。先生は、リーダーを育てるにはまず教育から始めなければならないとお考えになっていたと思います。それは、次世代のための政策立案者やリーダーを生み出すことでした。

益尾教授の報告には非常に感動させられました。個人的にもそうですが、研究者として特に中国について私たちが今直面している課題に対する率直な思いに感動しました。北朝鮮についても同じことが言えるかもしれませんが、聞き取り調査というフィールドワークの方法を失ったとき、私たちはどうすればいいのでしょうか。私は現代中国を専門とする研究者ではありませんが、それでも多くのフィールドワークをしてきました。しかし、現在はフィールドワークを行うことが大変難しくなっています。

今日の午前、ハーバード大学におけるアジア研究の歴史について講演した際、私はホームズ・ウェルチ (Holmes Welch) という人物を取り上げようとしていたのですが、言及することができませんでした。彼は対象を外側から研究するというを進めた人物で、毛沢東政権下の仏教について大変に影響力のある本を書きました。彼は、中国から香港に脱出してきた中国人仏教徒に聞き取り調査をしたのです。つまり、研究対象の周縁からアプ

ローチしたわけでは、ヴォーゲル先生はホームズ・ウェルチのことを知っていたと思います。今日の午前中は触れることができませんでしたが、私の研究分野では、彼は非常に強い影響力があるのです。

フィールドワークが難しい状況にある現代の私たちは、地道な資料の収集、調査に尽力しなければなりません。先ほど益尾教授が述べられた CNKI (China National Knowledge Infrastructure : 中国學術雑誌全文データベース) のような電子データベースの利用も難しくなるというのは、研究者たちにとって大きな問題です。そうした状況に対しては新しい方法論が必要となるでしょう。

それがどのようなものであるのかは、私には分かりませんが、とにかく研究者はあらゆる資料を収集すべきだと思います。実際、ヴォーゲル先生の書齋を見るとさまざまなものが山積みになっています。できうる限り多くの情報を収集し、それらを手元に保存しておくべきなのです。また、以前、私はあるアーカイブズの情報を得ました。その時はさして興味を持っておらず、とりあえずそのデータを全て入手しておいたのですが、その後、そのアーカイブズにはアクセスすることができなくなってしまいました。しかし、現在の私はその時に得たデータの分析に多くの時間を費やすようになっています。

以上がみなさんの報告についての私の考えです。ありがとうございました。

第二部 パネルディスカッション「アジア研究の過去・現在・未来」

II 一般討論

パネリスト :

クリスティーナ・L.デイビス (ハーバード大学日米関係プログラム所長)
 ジェームズ・ロブソン (ハーバード大学アジアセンター所長)
 リチャード・ダイク (ハーバード大学アジアセンター顧問)
 今井耕介 (ハーバード大学教授)
 趙全勝 (アメリカン大学教授)
 益尾知佐子 (九州大学教授)

モデレーター : 李春利 (愛知大学国際中国研究センター所長)

- ・ 総括 佐藤元彦 (愛知大学国際研究機構長)
- ・ 全体講評&閉会の挨拶 鈴木孝昌 (中日新聞社取締役)

田中英式 (愛知大学経営学部教授、総合司会)

それでは、第二部のパネルディスカッションを再開させていただきます。これ以降は李春利先生にモデレーターをご担当いただきます。よろしくお願いいたします。

李春利（愛知大学国際中国研究センター所長）

ここからパネルディスカッションの部分に入りたいと思います。ディスカッションポイントについては、大きく二つ用意しました。また、ChatGPTで英語にも翻訳しました。

もしヴォーゲル先生がここにおられるとしたら……

パネルディスカッション・ポイント

李 春利

1. 今から3年半前、2019年11月23日に、エズラ・ヴォーゲル先生がまさにこのホールのこの壇上でご講演をしてくださいました。

- 1)もし仮に今日、ヴォーゲル先生がここにおられるとしたら、彼は現在のアジア情勢、例えば、米中関係や日中関係についてなにをおっしゃるのでしょうか。
- 2)さらに、この難しい時代におけるアジア研究の今後のあり方について、どのようなアドバイスをするのでしょうか。
- それぞれのご立場からご見解を述べていただくとありがたく存じます。

1

では、1番目の質問にいきたいと思います。今から3年半前、つまり2019年11月23日に、エズラ・ヴォーゲル先生がまさにこのホールのこの壇上でご講演をしてくださいました。そこで二つの小さい質問に分けたいと思います。

1)もし仮に今日、エズラ・ヴォーゲル先生がここにおられるとしたら、彼は現在のアジア情勢、例えば、米中関係や日中関係についてなにをおっしゃるのでしょうか。今日、ここに来ている皆さんは、みんなヴォーゲル先生と非常に縁の深い方々ばかりですので、例えば、ヴォーゲル先生の立場になっていただいて、どのように見ていらっしゃるのでしょうか。

2)2つ目の質問ですが、さらに、この難しい時代におけるアジア研究の今後のあり方について、どのようなアドバイスをするのでしょうか。それぞれのご立場からご見解を述べていただくと幸いです。

Panel Discussion Points

By Chunli Li

1. Three and a half years ago, on Nov. 23, 2019, Professor Ezra Vogel gave a lecture precisely on this stage in this hall.

1.a) If Professor Vogel were here today, what would he say about the current situation in Asia, such as US-China relations or Japan-China relations?

1.b) Furthermore, what advice would he give to us about the future direction of Asian studies in our current challenging age?

We would appreciate hearing opinions and comments from each of you.

3

こうした問題を提起した背景としては、約3年前にヴォーゲル先生が他界されてしまい、まるで一つの時代が終わってしまったような喪失感にかられているということがあります。最近、前の世代の方々が次々と亡くなられ、また、世界情勢も一変してしまい、非常に戸惑いや迷いの多い時代になってしまったと感じているのです。

この壇上にはアメリカ人、日本人、中国人がバランス良く居られますので、それぞれのご立場でコメントしていただければ幸いです。最初に、やはりヴォーゲル先生と半世紀以上のお付き合いがあるリチャード・ダイク先生にお願いしてもよろしいのでしょうか。もしヴォーゲル先生がここにおられるとしたら、今のアジア情勢についてどのように見おられ、そして、われわれに対する期待はどのようなものになるのでしょうか。

リチャード・ダイク (Richard Dyck、ハーバード大学アジアセンター顧問)

米中間の問題を目の当たりにしていると、私はヴォーゲル先生の活動をよく思い返して考えます。2019年11月にヴォーゲル先生が愛知大学を訪問された後のことですが、米中間の雰囲気が大変難しいものになっていきました。2020年9月ハーバード大学の夏休み明けにヴォーゲル先生は中国人の学生たちへ手紙をしたためています。そこには、

今は非常に難しい雰囲気なので、みなさんはアメリカ、そしてハーバード大学の中でも不快な思いをすることがあるかもしれません。しかし、君たちはアメリカと中国の未来の架け橋なのです。われわれは君たちを必要としています。安心してください。何か助けが必要ならば、私のところに来てください。

と書かれていました。先生は米中関係が悪化した中での中国人学生の生活を心配しておられたのです。そして、彼らこそ米中間の問題を解決しうる人たちなのだとお考えになって

いたのです。これからは他の先生方に、ヴォーゲル先生だったらどうするのかということを考えながら、先生が果たされた役割を担っていってくれることを願っています。

李：ありがとうございます。では、次はジェームズ・ロブソン先生にお願いいたします。

ジェームズ・ロブソン (James Robson、ハーバード大学アジアセンター所長)

私は現代アジアに関する政治経済や社会科学を専門とする研究者ではありません。しかし、アジアセンターの所長として、そうした分野の課題について考え、また私たちが開催してきた講演会などを通して多くの専門家から学ぶ機会を得てきました。

二国間関係のような単純な問題ではない

そこで李春利教授の質問に私が答えるとしたら、正直なところ、ヴォーゲル先生がどのように答えられるかはわかりません。しかし、先生が指摘されるであろうことの一つは、今日直面している問題というのは米中や日中の二国間関係のような単純な問題ではないということです。

最近、あらゆることが極めて複雑になってきています。先生もそのことはお気づきだったでしょう。中国とアメリカに関わる問題といっても、中国とアメリカだけではなく、そこには日本も関わってきます。さらに台湾も、韓国も関わってきます。デイビス教授はさらにインドについて言及されていらっしゃいました。さらにアフリカやウクライナ戦争、ロシアまで関わってくると言えるでしょう。

今、申し上げたように、二国間のみの単純な関係はありません。今日の午前中に申し上げた東南アジアの問題も、大きく関わってくると思います。デイビス教授の講演資料の中で興味深かったのは、中国に対するネガティブなイメージの中で、東南アジア諸国で唯一、一番下にシンガポールが挙げられていたということです。

ASEAN の重要性

私は 12 月に東南アジアを旅行したのですが、インドネシアとフィリピンとでは中国への見方が大変異なっていました。東南アジア諸国連合 (ASEAN) では、一方的な決定は行われず、合意に基づいた決定がなされています。そこにはアメリカと中国の間であって、そのどちらか一方だけを選択するというをしないで済む方法をさぐっていかうという姿勢があります。現在の状況下であって、そうしたことをどのように進めていくのかということは、より重要性を増していると思います。

また、デイビス教授があまり取り上げられないことがない RCEP (東アジア地域包括的経済連携) について言及されたことは大変重要なことだったと思います。これは 2022 年 1 月に 15 カ国によって立ち上げられた組織です。私はこれを史上最大の貿易ブロックであり、さまざまな問題について大きな影響を与えるものだと考えています。

ほとんどのアメリカ人は中国についてはそれほど詳しくないにもかかわらず、理由も分からないまま中国に対してネガティブな印象を抱いています。これは大きな問題です。ヴォーゲル先生が積極的にメディアに出てインタビューを受けて中国について啓発されたり、専門家として政府の政策決定や実行に参画されたりした理由はここにあると思います。

私は、先生ならば、中国に関する話の中に東南アジアのことを持ち込んでくるのではないかと思います。なぜならば、これからのアジア研究の方向性を考えると、経済発展や政治問題、さらに気候変動に至るさまざまな問題において、その中心となっている地域は東南アジアであるとお考えになると思うからです。デイビス教授の報告によれば、先生はすでに 1996 年にマレーシアについての研究をお進めになっており、このことをお考えになっていたことがわかります。

先生は将来を見越して研究を進められていたのかもしれませんが。また、私たちは先生の研究から今後の手がかりを得ることができるのかもしれませんが。

以上が、私の考えです。ありがとうございました。

李：では、クリスティーナ・デイビス先生にお願いいたします。

クリスティーナ・デイビス (Christina Davis、ハーバード大学日米関係プログラム所長)

私はヴォーゲル先生の代弁をするつもりはありません。今井教授がおっしゃったように、先生は学生たちが自分の意見をもつことを望んでいました。これから私は日中関係、米中関係について述べていきますが、もちろん先生から学んだことが反映されていますが、あくまで私自身の意見です。

中国を孤立させたままでは、将来的に恐ろしい事態も

中国との関係が緊張している中で、中国を封じ込めてその成長を止めるのか、防衛力を強化するのか、あるいは中国への協力を続けていくのか、とさまざまな議論があります。多くの人々は、1990 年代に中国を世界貿易機関 (WTO) に加盟させ、わが国の企業との合弁事業を許したことは間違いであったと考えています。それによって中国は豊かになり、今や中国はその富を用いて国防費を増やし、国民を監視するようになって人々を恐怖させているからです。

私は、中国への関与政策にコストがかかること、国際的なルールがすべての国を拘束することができないことに賛成します。また、富を得たからといって、自動的に民主化への道に進むとは限りません。しかし、これまでの中国への関わり方がすべて誤りであったとする必要はないと考えます。なぜならば、中国を孤立させたままにしておくというのは、将来的により恐ろしい事態を招く可能性があるからです。あれだけの人口と素晴らしい才能を備えている国に対して「国際機関に参加することはできません。経済活動においてわれわれは対等になることはできません」としたほうが良い結果につながったのでしょうか。おそらく、そうではないでしょう。

批判と新たな政策の組み合わせを

では、今、私たちは中国とどのように関わるべきなのでしょう。そこで、エズラ・ヴォーゲル先生からの教えの一つを思い出します。それは、ある国が望ましくない政策をとっているのを見て難しく感じたときの対応についてです。ただ非難するだけでいいのか、あるいは批判してどうなっていくのかについてあらかじめ考える必要があります。ある政策については反対しますが、同時に関係改善の機会を設ける必要もあるでしょう。しかし、アメリカは、中国との経済問題に関して、中国が補助金についての透明性を高めて公正な競争を可能とすれば、制裁を撤回したり、新たな組織への加入を可能としたりすることができるでしょうか。

日本は「環太平洋パートナーシップに関する包括的および先進的な協定」(CPTPP)において、アメリカが手を引いた後にリーダーシップを発揮しました。そして、最近、この協定に中国が加入を申請するという興味深い展開がありました。さらに台湾も加入申請をしています。また、ほんの数カ月前にはイギリスが加盟しています。こうした状況は日本にとって重要な経済機会を創出しています。日本とCPTPP加盟国は、国有企業の透明性に関する規定を設けていますし、漁業への違法な補助金を規制する規定も設けています。このように高い基準を保ちつつも門戸を開き、さらに信頼しつつ検証もすることは、中国の変化を促す方法となるかもしれません。

つまり、批判することと、新たな政策、改革、高い基準を組み合わせる必要があるのです。批判しつつも、同時に手を差し伸べるのであり、これはエズラ・ヴォーゲル先生の教えと一致するものだと思います。

李：実は今、デイビス先生の発言の一部は、昨年、われわれが出版した本の中に入っております。昨年9月にICCSから『不確実性の世界と現代中国』¹¹という研究書を日本評論社から出版いたしました。クリスティーナ・デイビス先生には「東アジアの成長モデル—規則に基づく貿易秩序における対立と協力—」という論文を執筆していただき、収録させていただきました。これは一般公開されている本です。また、ヴォーゲル先生のご令息スティーヴン・ヴォーゲル先生にも1章分を担当していただいております。

さて、今、中国に関する話がだんだん中心になってきましたが、趙全勝先生、なにかコメントがありますでしょうか。

趙全勝 (Zhao Quansheng、アメリカン大学国際関係学部教授)

私は過去40年間、東アジア関連の授業を担当してきました。最近、私のセミナーである学生が「ああ、過去1000年とは言わないまでも、数百年もの間、中国と日本の間には常に苦い感情がある。平和共存の時代はない」と言ったのですが、私はすぐに「それは間違

¹¹ 李春利 [編著] 『不確実性の世界と現代中国』、日本評論社、2022年。本誌書評参照。

っている」と返しました。なぜならば、中国と日本の間には 1970 年代以降、「ハネムーン時代」と呼べる時期があったからです。

鄧小平：「貧乏な隣人を忘れないように」

私自身も、その時期の最中である 1985 年からの 1 年間で日本を過ごしています。だから、先ほど紹介したような若い学生の言葉を私はいつも訂正するのです。彼らは「日中友好」という時期があったことを知らないのです。その時期には真の友情がありました。私たちはそのことを記憶し続けておくべきだと思うのです。

1978 年、日本を訪問した鄧小平は、中国は近代化が必要だという趣旨の演説をしました。彼は「皆さんは今、お金持ちです。でも、貧乏な隣人を忘れないように」と語りました。つまり、助けを必要としている貧しい隣人がいることを忘れないでほしいということです。これに大平正芳を含む多くの日本人は心を動かされました。その翌年、日本は中国に対して政府開発援助（ODA）を開始しています。

最近、日本放送協会（NHK）は中国の上海にある宝山製鉄所についてのドキュメンタリー番組を製作しましたが、それによれば、日本の支援は ODA だけではありませんでした。日本は中国の近代化のために膨大な資金を提供しており、宝山製鉄所には数百人の技術者も派遣して支援していました。また、外務大臣経験者である大来佐武郎のような有力者が中国政府の近代化のための顧問を務めています。私がここで言いたいのは、中国人も日本人もそうした時期があったことを忘れてはいけないということです。

周恩来から田中角栄へ：「言必信、行必果」

数週間前の早稲田大学でのセミナーの中で、元・外務次官が「米中関係が悪化した場合、日本は仲介役としての役割を果たす可能性があるか」という質問に対して、「いいえ。われわれはアメリカの同盟国だから、そんなことはできません」と答えたそうです。これには驚きました。というのも、日本は常に東西の架け橋の役割を果たしてきたからです。この重要な時期に、なぜ日本はそうした役割を果たすことができないのでしょうか。私の記憶では、天安門事件の後、西側諸国の中で中国に対する経済制裁を最初に解除したのは日本でした。

私自身の考えに戻ります。米中関係については、競争の期間が長く続くだろうと思っています。では、どうすればよいのでしょうか。これについては、私は、1986 年に長野県で 1 週間ホームステイをしたことを思い出します。そこで私は本当に多くのことを学びました。そのとき、感想を聞かれたので、私は漢字で「理解」と書きました。

国と国、人と人之间では、相互理解が必要なのです。それが鍵なのです。ですから、1972 年に田中角栄総理が北京を訪れた際、周恩来首相は「言必信、行必果」（言ったことは守り、必ずやり遂げる。『論語』子路第十三より）という言葉を送ったのです。このことは約束を守り、信頼を築くことの重要性を示しています。

中曽根康弘：「東アジア的なアプローチ」

ですから、今日の報告で、私は中曽根康弘さんの言葉を引用したのです。「東アジアの問題に対処するための東アジア的なアプローチ」という助言はとても役立つものだと思います。

さて、今回、クリスティーナ・デイビス教授、あなたは特に素晴らしい報告をしてくださいました。あなたの講演資料を見て、本当に感動しました。1971年、社会学者としてエズラ・ヴォーゲル教授はニクソン大統領に中国との関係について手紙をしたためました。それは研究者としての責務です。エズラ・ヴォーゲル先生は優れた研究者であるだけでなく、一生を通してそのような責任感もあわせ持っておられたのです。今、国と国との関係は悪化していますが、人と人、研究者と研究者の関係はそうではありません。

益尾先生は、現在、中国に来るのも行くのも難しいとおっしゃっていました。しかし、ヴォーゲル教授が研究を始められたときもそうだったのです。彼が「広東」を選んだ理由の一つは、アメリカの研究者が中国に行くことが難しかったからだと思われまふ。ですから、当時のアメリカの研究者は現地調査をするために香港に行ったのです。そのような特殊な事例は、私たちに焦ってはいけないということを教えてくれます。ヴォーゲル教授の言葉を借りれば、「決してあきらめないで、研究を続けなさい」ということです。

では、ありがとうございました。

李：なかなか面白い展開になってきました。世代によって、日中関係、米中関係、中日関係の捉え方がだいぶ違うようです。みなさんご自分の世代のことを意識しながら語っていらっしゃいますね。

今回、第1回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」の共通論題は「アジア研究の過去・現在・未来」というものです。皆さんには過去、そして現在を語っていただきましたが、これから未来はどうするかについて少し議論を展開していただけると幸いです。

そこで、益尾先生が先ほどノミネートされましたので、ご発言をお願いいたします。益尾先生の近著『中国の行動原理—国内潮流が決める国際関係—』¹²は、非常に有名な本です。国内潮流が決める国際関係というのはなかなか良いポイントで、国内政治が外交を決めるといふ議論はよく聞こえます。益尾先生は、たぶんヴォーゲル先生の思考様式に一番なじんでいらっしゃる日本人なのではないかと思ひます。なにかコメントがありますでしょうか。

益尾知佐子（九州大学教授）

このパネルディスカッションポイントに従って、私も自分の考えを整理しておりました。それで思い出したんですが、私がヴォーゲル先生に対面でお会いすると、彼はいつも私にインタビューを始めるんですよ。いつも、好奇心いっぱいの方で。それで、彼が私に絶対に聞くトピックがありました。それは、私が教えている日本人の学生さんたち—留学生も

¹² 益尾知佐子『中国の行動原理—国内潮流が決める国際関係—』、中公新書、2019年。

いますけど—その人たちが今どういう暮らしを送っていて、どういうことを考えているのか、国際関係とか中国の人たちをどう見ているのかということなのです。その人たちの今の暮らしがあって、他の国との交流があって、人間関係があって、その上に将来の国際関係のあり方が決まってきます。だから、次の時代を見ていくためには、一人ひとりの若い人たちの見方がとても大事。彼はそういう考えの人でした。逆にいうと、国際関係の流れというのはすでに決まっているわけではなく、一人ひとりの人間のコミットメントによって変えていける、だから私たち自身が主体的に関わっていくことが大切、ということになるのだと思います。

対話があれば、信頼関係も生まれ得る

今井先生は、日本人の学生は昔、あまり自分の意見を言うようなトレーニングを受けなかったというような話をされていました。私もまったく同じで、初めて国際会議に出て英語で話をしないといけない時に、もう本当に詰まってしまって、何も言葉が出てこなかった記憶があります。たぶん私がそれまでに受けてきた教育に原因があるのではないかと思います。

でも、今の子どもたちというのはすごく違うのです。私たちの世代に比べたら、国際社会にずっと慣れてるし、柔軟な視線と視点で自分の身近なところから国際問題を考えることがすごく自然にできていると思います。これは中国人も同じです。私もたくさん留学生を教えています。中国政府は日本に対して好意的ではないこともありますが、中国の子たちは必ずしも政府の言うことを信じているわけではありません。個々の人間が自分の頭で自分の経験や利益に基づいて情報を処理し、判断しているのです。人間というのは、そういう動物だと思うのです。

そこに相手との対話があれば、ある種の信頼関係も生まれ得ます。また普段、私たちが日常生活の中で行っている教育のようなものが、将来の人たちの世界秩序を作る土台にもなるのでしょう。

それでヴォーゲル先生に、うちの九州大学の学生もすごく柔軟になっていて、自分たちの世代より議論もうまいし、外国人との交流も普通にできるようになっています、それに中国人と日本人の間であろうが、友情も愛情も普通に生まれていますよと伝えると、すごく喜んでいたのでした。

「ヴォーゲル・フィロソフィー」

今、趙先生からも米中対立が長期戦になるというお話がありました。私もそう思います。これは10年とかの単位ではなく、もっと長いような気がいたします。ですけど、なぜ私たちが今、国家同士で対立しているのかというと、やはり今、国際秩序の転換が起きていて、どの国も次の国際秩序の中で少しでもいいポジションを確保したいと考えているからです。それは自分たちの国民に直接関わってくるから、一生懸命にならざるを得ないのです。それで、私たちは競争しているのです。

しかし、互いにどこが譲れて、どこが譲れないのか、あるいはどうしたら私たち全体の利益が調整できるのかというのを長期的に考えていくためには、やはりたくさんの人材が必要だし、相手のことが分かる人間が必要です。私は、たぶん研究ではヴォーゲル先生にそれなりに合格点をもらえると思うのですが、人材育成に関しては、先生に「ごめんなさい、できていません」と言うしかない状態です。

ヴォーゲル先生は、若い人たちにいつも明るい希望を持っていました。彼は私のこともいつも励ましてくれ、みんなでアジアの未来を良くしていこうと、少年のように本気で言い続けていました。この仕事はつらいですが、すごくやりがいがある仕事なのです。もしこの会場にそういうことに興味がある方がいらっしゃったら、研究の世界なり、またそれとは違う形で社会的なミッションを担うような仕事を、ぜひ恐れずにやっていってほしいと思います。そういう人が増えれば、世界はもっと美しくなるというのが、「ヴォーゲル・フィロソフィー」の真髄でした。ヴォーゲル先生はそれを本当に信じていましたし、そのために多くの時間を使ってたくさんの人を励まし続けたのです。

李：実は、今井先生には2番目の大きな質問をご用意いたしました。先ほど今井先生のお話の中にも出ていましたが、これからの社会科学の研究の在り方や、国際政治や国際関係の研究の在り方についてです。今は、AIの時代やビッグデータの時代とよく言われていますが、このような時代は、われわれに大きな問題を提起されているのです。

アジア研究の未来：計量的研究と社会科学研究的な在り方

2. 2番目のディスカッションポイント：今後のアジア研究ならびに社会科学的研究の方法論について

—これまでの日本は、社会科学の研究分野において実地調査をベースとし、文献検索とディープ・インタビューを基本とした研究方法を取ってきました。エズラ・ヴォーゲル先生の研究スタイルも基本的には徹底した現地調査、インタビューベースの研究手法を取っているのではないかと思います。世界的に見ても、彼はこの研究方法を極めた一人とも言えます。

—ところが、数年前に私がハーバード大学アジアセンターで訪問研究した際に、とても刺激になったのは、経済学と経営学研究はさることながら、アメリカの国際政治学や国際関係論などの研究分野においても、計量的な研究や定量的なアプローチが主流になってきているということです。

—そのときに一緒にいた北京大学の先生も同じ感想でした。アメリカとは少し時間差がありますが、中国でもこの流れに徐々に乗ってきている感じです。

—今のビッグデータ時代、あるいはAI時代のアジア研究や社会科学的研究の方法論のあり方について、先生方の自由な見解を述べていただければ幸いです。

2

2番目のディスカッションポイントは、今後のアジア研究や社会科学的研究の方法論についてです。これまで日本は、社会科学の研究分野において実地調査をベースとし、文献検

索とディープ・インタビューを基本とした研究方法をとってきました。おそらく明治以降の150年間、日本における社会科学の基本的なスタイルは、こういうところがもっとも特徴的なのではないかなと思います。

中国は日本より遅れていたもので、中国人留学生は日本からいろいろ学んで中国に持ち帰っていました。そのことは益尾先生が翻訳されたヴォーゲル先生の最後の著書『日中関係史』の中に細かく書かれています。ヴォーゲル先生の研究スタイルも基本的には徹底した現地調査を重視し、インタビューベースの研究スタイルをとっているのではないかなと思います。『現代中国の父 鄧小平』の本を書かれた時も、約300人の関係者をインタビューしたのは有名な話です。世界的に見ても、彼はこの研究方法を極めた一人なのではないかなと言えます。

数年前、私はジェームズ・ロブソン先生が所長を務めておられるハーバード大学アジアセンターでフェローとして1年間訪問研究をしました。2018年から2019年間で、ちょうどコロナパンデミック前の「最後の夏休み」みたいな感じでした。訪問研究の際に、とても刺激的だったのは、経済学と経営学の分野はさることながら一ちなみに、私の専門分野は経済学ですが一今では、社会科学全般において計量的な研究や定量的なアプローチが主流になってきているということです。

驚いたのは、アメリカの政治学や社会学、国際政治や国際関係を含めて多分野にわたり、計量政治学や計量社会学といったように、計量的な研究が、今、主流をなしつつあるということです。とりわけ、アカデミックな分野において主流になっているということは、非常に刺激になりました。そして、私だけではなくて、北京大学国際関係学院の教授もそのときいましたので、彼もまったく同感でした。ただ、国際政治や外交の分野においてはどこまで定量化できるのかというのを、実はアメリカの学会の動向に注目しながら見ているところです。

2. The second point for discussion concerns the methodology for future Asian studies and social science research.

Up to now, Japan has mainly relied on research methods based on field surveys, literature reviews and in-depth interviews in the field of social science research. I believe Professor Ezra Vogel's research style is also based on thorough field surveys and interview-based methods. On a global scale, he is regarded as one of the leading experts who has mastered this research methodology.

However, when I conducted research as a fellow researcher at Harvard University Asia Center a few years ago, I was very inspired to learn that the quantitative research methods are becoming mainstream, not only in the fields of economics and management studies, but also in international politics and international relations in the U.S.

The professor of Peking University who accompanying me at that time had the same impression. Although there is a slight lag compared to the United States, it seems that China is gradually adopting this trend as well.

Considering the age of big data and AI, we would like to hear your frank opinions on the methodology for future Asian studies and social science research.

アメリカとは少し時間差がありますが、中国国内もこの潮流に徐々に乗ってきているように思います。今井先生のご著書『社会科学のためのデータ分析入門』（岩波書店）¹³も中国語に翻訳されました。この分野ではフロンティアを走っておられるので、中国でも注目されています。だから、今のビッグデータの時代、あるいは AI の時代におけるアジア研究や社会科学の方法論は、おそらく一つの曲がり角を迎えているのではないかと思います。今井先生には、先ほどのお話もちょうどこのあたりでしたので、その在り方についてコメントをお願いいたします。

今井耕介（ハーバード大学政治学部・統計学部教授）

どうもありがとうございます。私の理解を少し述べさせていただきます。

ヴォーゲル先生の貢献と先駆性

私が思うには、ヴォーゲル先生は彼の生きた時代で先駆的な研究をしていらっしやっ、たぶんアジアがあまり欧米で理解されていない時に、日本だけではなく、中国や韓国について、彼の知識や言語能力、そして人間のネットワークを生かして、ああいう先駆的な研究をなされていました。誰もやっていないようなことを一人でやられたということで、それがすごいインパクトがあったのではないかと思います。

ただ、時代が変わると、たぶんなにが先駆的な研究かというのが変わってきています。私はいつも学生に言っているのは、僕がしていることをまねしても駄目だよ。もう僕がやっちゃったから。自分で新しいなにかを、誰もやっていないようなことを探してごらん、ということです。

そういう意味で、社会がどんどん変わっていく中で、これからなにが必要かということ考えた時に、日本ではやはり文系か理系かというのがはっきり分かれていることが気になるところです。例えば、高校生ぐらいになると、私は理系とか、僕は文系とか、そういう話になって、数学は勉強しなくなるとか、国語の古文は読まなくなるとか、そういう話になると思うのです。

今後の方向性：研究は「チームスポーツ」

先ほど誰か環境問題の話もされましたけれども、今の時代というのは、相互依存が進んで、国と国との結びつきが非常に強くなってきて、社会が直面している問題もどんどん変わってきています。

¹³ Kosuke Imai, *Quantitative Social Science: An Introduction*, Princeton University Press, 2018. 日本語版：今井耕介『社会科学のためのデータ分析入門』（上・下）、粕谷祐子、原田勝孝、久保浩樹訳、岩波書店、2018年。中国語版：今井耕介《量化社会科学导论》，祖梓文，徐轶青译，上海财经大学出版社，2020年。

例えば、今回のコロナパンデミックの件も、医学だけの問題ではなくなってきました。ワクチンをどうして打たない人がいるのか、どうやったら打つようになるのかといったように、コロナがまん延した時に、各国の政策はどう変わって、人の移動はどう制限されていくのか、それはすでに総合的で非常に複雑な問題になってきています。それはもう生物学や医学だけの問題ではなくて、社会科学も政策も一緒になって対策を考える必要があります。

環境問題もそういう面があると思うので、これからはあまり文系とか理系とか、質的とか量的とか、ということにとらわれずに、みんなで協力して対応する必要があると思います。私がよく思っているのは、研究というのは「チームスポーツ」で、一人で全部やる時代はたぶんもう終わっているのではないかということです。なぜかという、一人で全部深く知ることはそもそも無理なのではないかと思います。

学際的共同研究とアカデミアの構造的問題

私は、アジア研究を全然していないので、何も分かっていません。益尾先生はよく分かっていて、中国のことは特によく分かっていらっしゃいます。ただ、私は一応ずっと統計の勉強をしてきたので、統計のことはある程度分かってはいます。そういういろんな分野の専門家が一緒に共同で研究をしていくことが、たぶんますます必要になってくると思います。

ただ、アメリカも日本も大学やアカデミアの作り方がやはり分野別に分かれてしまっているのが現状です。例えば、統計学なら統計学の学会があって、雑誌があって、学部がある一方で、アジア研究の学部はまた別にあります。そういう学際的な研究や教育を行うのがなかなか難しいです。先ほど述べてきたような構造的な問題があるからです。

でも、学生を見ていると、彼らは今の世界に生きているので、そういうことにとらわれずに興味や関心があるのも事実です。だから、なるべくいろんな学部のいろんな授業を取って、そういう教育を受けてほしいなと思っております。例えば、ハーバード大学では最近、「ダブル・コンセントレーション」(double concentration) といって、二つの専攻、つまり「ダブルメジャー」のようなことを積極的に取り入れています。時代が変わって、そういう時代になってきていると思います。

私はそういうふうに、ヴォーゲル先生が先駆的な研究をしていた過去を基に、今後いろんな研究者や専門家たちが一緒になって、現在の問題に対して解決策を出していくような世界になれば望ましいと思っております。

李: ありがとうございます。実は今井先生の先ほどのご発言の中で、娘さんがアメリカ生まれで、小学生2年生の時に親を説得しなさいという課題が出されたことは、非常に興味深い事例だと思います。アメリカのクラスでは、質問しなさいと言われたら、とにかく先に手を挙げるのですね。

私もハーバード大学ではいくつかのスクールの授業を聴講させてもらったことがあります。例えば、ビジネススクールでは、授業への参加態度が成績評価に占める割合が高く

て、発言しないと、存在感がなくなり、たとえ全部出席してレポートを提出しても、F あるいは D になる可能性があると聞いています。そのようなトレーニングにはみんな慣れていいますので、だから、アメリカ人は国際舞台でダイナミックに動くようになっているのではないかと思います。子どもの頃受けてきたトレーニングがそもそも違うと感じました。

田中：これでパネルディカッション終了です。最後に、総括に入りたいと思います。まずは佐藤先生より総括をお願いいたします。

総括

佐藤元彦（愛知大学国際研究機構長）

皆さま、ご苦労さまでした。今日は、朝 10 時からという大変なプログラムでした。いろいろ個別の問題、例えば、米中関係、日中関係等々出ているのですが、それについてはなにかコメントを申し上げることは差し控えたいと思います。

愛知大学と東亜同文書院大学

今日の午前中に、ロブソン先生から「ハーバード大学のアジア研究」という非常に長い歴史、そして重厚な歴史について教わりました。これについては、今回の企画だけでは消化しきれない部分もありますので、今後ともそれを一つの参考として、いろいろと愛知大学としてどう受け止めることができるかということを含めて、検討が必要なのではないかと考えております。

その一方で、私自身は中国研究の専門家ではありませんが、愛知大学の中国研究には非常に誇りを感じております。昨日、実はパネリストの皆さんは豊橋校舎に行かれて、豊橋校舎の大学の歴史や、あるいはそれにつながる東亜同文書院大学の歴史について、展示物をご覧になったというふうに聞いております。今回はその感想を述べていただく時間はございませんでしたけれど、今後、愛知大学とハーバード大学が交流を深めていくという意味でいえば、ハーバード大学の皆さんが愛知大学の歴史、あるいは東亜同文書院大学の歴史をどうお感じになったのかということについても交流を深めていきたいなと思っております。これが第 1 点目です。

教育・研究と人材養成とは切り離せない

それから第 2 点目は、やはり研究と教育というか、人材養成というのは切り離せないんだということがよく分かりました。ハーバード大学の非常に重厚な歴史を支えてきたのは、やはり人材であったんだろうと思うのですね。そういう意味では、ともしれば研究機

関というのは研究だけに埋没するような傾向があるのですが、やはり同時にどういうふう
に人を育てていくのかということが大事だということを痛感いたしました。

これも李春利先生に代わって申し上げますけれども、愛知大学国際中国学研究センター
(ICCS) は、人材養成にも非常に力を入れてまいりました。今日手伝っていただいている
若いスタッフも、これも若手研究者養成というプログラムの一環として、研究センターの
ために働いていただいている方々なんですね。そういう意味では、研究とは一体なんなの
かということも含めて、改めて考える必要があるということをも痛感いたしました。

質的な研究と計量的な分析

それから、今日、研究の今後ということで、私自身が特に注目したのは今井先生のご発
言です。それはなにかというと、いわゆる質的な研究と計量的な分析の関係の在り方です。
おそらくヴォーゲル先生は質的な研究という点でいえば、相当な伝統を残されてきたと思
います。もちろんご自身がフィールドワークを重ねていって、独自のデータを集められた
ということは、そのとおりですが、現在のビッグデータとか生成系の AI というものをも
しヴォーゲル先生だったら、どういうふうに使われるのだろうかということに非常に関心
を持った次第です。

これは残念ながら、ヴォーゲル先生にはお答えいただくことはできませんので、われわれ
がやはりヴォーゲル先生の研究を通して、そのことを考えていくということになると思
うのですが、2つの関係を考える際には、研究の社会的貢献というのをどういうふうにか
考えるのかという問題があると思います。そのことに深い洞察なくして2つを結び付ける
ことはたぶん難しいと思います。計量分析に走るという問題でもないし、逆に質的な研究
だけで終始するということでもないと思います。その辺については、今後もいろいろとお
教えいただきたいと思います。

いずれにしても、手前みそで恐縮なのですが、今回の第1回「エズラ・ヴォーゲル記念
フォーラム」は大成功であったというふうに私としては総括をさせていただきたいと思
います。ありがとうございました。

田中：佐藤先生、どうもありがとうございました。それでは最後になりますが、今回共催
いただきました中日新聞社取締役の鈴木孝昌さまに全体講評と閉会のご挨拶をお願いいた
します。鈴木さま、お願いいたします。

全体講評&閉会の挨拶

鈴木孝昌（中日新聞社取締役、元編集局長）

皆さま、お疲れ様でした。ご紹介いただきました中日新聞の取締役をしております鈴木
でございます。共催者ということでもありますので、最後に一言ご挨拶させていただきます。

今日はエズラ・ヴォーゲル先生のゆかりの方々が一堂に会していただいて、それぞれの思い出を交えながら、非常にバラエティーに富んだ話を聞かせていただきました。もっと硬くなるかなという予想をしていたんですけども、非常に柔らかく楽しんで聞かせていただきました。

ヴォーゲル夫人のビデオメッセージ

まず、最初のヴォーゲル夫人のビデオメッセージが非常に印象的でした。ヴォーゲル先生の仕事ぶりや人柄などがはっきりと浮かび上がっていたと思います。その中では、ヴォーゲル先生がフィールドワークを非常に重視し、インタビューするということが何度か出てきました。われわれマスコミもインタビューする仕事なので、非常にここに注意して拝見しました。まず相手を安心させること。それから批判しないこと。そのテクニックというのすごいなと思いました。

たしかにそうしていくことによって、相手の心を開かせて、いろんなことを話していただけるようになると思います。それはおそらくヴォーゲル先生の人柄というよりも、非常に計算された緻密な技術によって、テクニカルに行われているという印象を受けました。その辺がヴォーゲル先生のすごいところだなと改めて思った次第です。

エズラ・ヴォーゲルとドナルド・キーンは日本の恩人

数々の著作を紹介していただきますと、本当に日本のことをよく理解して、多くの著作を英語で著していただきました。日本の文化、歴史、社会、習慣をこれだけ幅広く世界の多くの人々に伝えていただいたという意味で、日本にとっては、本当に大恩人であり、欠くことのできなかつた人であったと思います。

同じように日本で活躍されたアメリカ人で、ドナルド・キーン (Donald Keene) さんという方がおられました。彼は三島由紀夫とか安部公房と親しく、万葉集などの古典も含めて日本文学を、アメリカや世界各地へ英語に翻訳し発表していただいて、日本の文化を世界中に広めていただきました。そのお二人が奇しくも1年違いで、ドナルド・キーンさんが亡くなったその翌年にヴォーゲルさんが亡くなってしまわれた。二人の日本研究の巨人を日本人は相次いで失ってしまったという、われわれ日本人にとっての大きな損失であったと改めて思います。

歴史認識の難しさと「第三者の目」

最後に、少し歴史認識の話が出まして、白熱した議論になりましたけれど、私はダイク先生のご発言に¹⁴少々驚かされました。ベトナム戦争のことがアメリカの教科書に載って

¹⁴ ダイク氏の発言は質疑応答の部分に出てきたものであったが、紙面の関係上、この特集ではQ&Aに関する部分は割愛させていただいたことを付記しておきたい。

いないというのは、初めて聞きました。中国だって教科書に天安門事件は載っていません。自分の国を客観視して歴史に残す、あるいは子供たちに伝えるということがいかに難しいかということではないでしょうか。

そういう意味でも、このヴォーゲルさんのような「第三者の目」による別の国に対する詳細な分析、客観的な研究、こういうものがいかに大事かということが、改めて痛感した次第です。日中の間で領土問題がある、歴史認識の問題がある。それについて日本と中国で言い争っていたら、永久にらちが明かない。だけど、ひょっとしたらアメリカ人の方が何か言っていただくことによって説得力を持つかもしれない。そういうような関係性というのが、どんな二国間関係にも当てはまるのではないかと思います。

そういう意味でも、やはりエズラ・ヴォーゲルさんというのは、本当に偉大な方であって、日中関係にとって大きな役割を果たした人であったと思います。本当に惜しい人を失ってしまったのです。こういう形で、ヴォーゲルさんの思いを愛知大学が継承して行って、今の学生たちに伝えていっていただくということが本当に素晴らしいことだと思います。

ヴォーゲル氏の『胡耀邦』研究に期待

冒頭のビデオにまた戻りますけれども、胡耀邦さんの研究をしておられたというお話がございました。実は私は胡耀邦さんの大ファンでして、彼ほど日本との関係を重視して、日中関係の未来を考えていこうとしていた指導者はいなかったのではないかと思います。あのビデオにも出てきましたけれど、中曽根康弘さんとの関係が非常に強くて、お互いの国の若者 3,000 人を相互に交換して、将来の日中関係を築いていこうということをやってくれた指導者だったわけです。胡耀邦さんの時代の日中関係というのは、私は日中関係における「蜜月時代」のピーク、最後のピークの時代であっただろうと思います。

山崎豊子さんという作家が北京を訪問して、胡耀邦さんに会いました。当時の中国はまだ改革開放が始まったばかりで、開放されていない地域がいっぱいありました。秘密な場所がいっぱいあったのですが、その時に胡耀邦さんは、どんな場所でも、どんなところでも見てくださって結構です。中国の悪口を書いてもらっても、なにを書いてもらっても結構ですと、山崎豊子さんに言っていました。それで、あの名作『大地の子』¹⁵が生まれたわけですね。

そういう腹を持った指導者、この胡耀邦さんについてエズラ・ヴォーゲルさんが、鄧小平と並んでというか、鄧小平よりは実は先に注目して研究していました。それが志半ばで日の目を見なかったという話を聞いて、非常にわくわくしています。なにが一体書かれているのか。ヴォーゲルさんならではの、何百人もの方に恐らくインタビューをして、胡耀邦さんにまつわる秘話が出てくるかもしれない。

これからおそらくハーバード大学と愛知大学の協力によってその内容が明らかにされていくのでしょけれども、例えば、日中関係において胡耀邦さんがなにかとんでもないアイデアを持って実現しようとしていたかもしれない。あるいはもっと楽しみなのは、中

¹⁵ 山崎豊子『大地の子』上・中・下巻、文藝春秋、1991年。文春文庫、1994年。

国の民主化についてなにかとんでもないアイデアを持っていたかもしれない。そんなようなことをヴォーゲルさんがもしも書いていてくれたなら、すごい大発見になるのかもしれないという期待をしております。

そういうもろもろを含めて、この「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」は、非常に有意義なイベントになったというふうに思います。これが初回で、来年以降もまた続けられるということを知りました。3回続けるそうですが、次回以降も非常に楽しみだと思えるような内容になると思います。

どうも本当にありがとうございました。皆さま、お疲れ様でした。

田中：鈴木さま、どうもありがとうございました。以上をもちまして、第1回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」を終了させていただきたいと思います。長時間どうもありがとうございました。では、最後にご登壇の先生方にもう一度拍手をお願いいたします。

(監訳：李春利、校正：石田卓生)